

《何故、日本は戦ったのか？》

日露戦争編 陸軍の巻 前編

大東亜戦争の直前、チャーチルは松岡洋右外相に対し書簡で「鉄鋼生産高で英米は日本の 12 倍であり、ドイツが敗北すれば日本は単独で戦えない」と警告した。だが日露戦争当時のロシアの鉄鋼生産高は日本の 30 倍であり、状況は大東亜戦争以上に厳しかったのである。

よく「日支事変等の日本の大陸政策は中国侵略だった」と戦後は非難されたが、日本が満州に進出したのは、南下するロシアの脅威に対抗する為だった。侵略目的で、資源も兵力も 10 倍～30 倍も違う相手と戦争をする馬鹿な国などあるまい。満州に居座るロシアを撤退させ、且つ朝鮮半島でロシアに譲歩させて日本の優位を確立する事が狙いであり、大陸政策の目的はロシアの膨張主義への対抗だった。日本にとって唯一の勝機は、シベリア鉄道の輸送能力の弱いうちに開戦する事だった。そのタイミングを誤れば勝ち目などない、まさに背水の陣だったのである。伊藤博文も戦火が日本にまで及び、本土決戦になる事を覚悟していた。世界世論でも、小国日本がロシアに勝てるという予測は全く出ていなかった。例外として、児玉源太郎を育てたドイツ参謀本部の参謀メッケルと清国の立憲派のリーダーである張謇（ちょうけん）ぐらいだった。

戦後生まれの人には理解できないだろうが、満州とは日本の生命線に等しい存在だった。当時日本はイギリス・ドイツ・イタリアといった国と同盟を結んできたが、日露同盟・日ソ同盟の道は考えられなかった。現在でもまずあり得ないだろう。ロシアと日本はそれほど立場の違う相手であった。その時代の国際情勢や国家間の「力学関係」を全く知らず、後知恵で「他国を踏みにじった侵略戦争」などと決めつける行為は決して許されるものではない。

日露戦争の 12 年後にあたる 1917 年に締結された石井・ランシング協定でも、米国は「支那の独立を毀損せざる範囲に於いて、日本の特殊権益を容認」する立場を示している。このようにしてロシアは南満州を日本に明け渡したものの、北満州は支配下に置き、満州は 26 年後の満州事変まで二分状態が続いた。しかし 1919 年に樹立されたソ連政府（1917 年の革命でロシア崩壊）は中国における全ての権益を放棄し、不平等条約も撤廃した。また 1911 年の辛亥革命で清朝が倒れ、中華民国が建国。内戦によって各地に政府が乱立し、日本の権益を否認する動きが激化した結果、「日本の生命線」である満州を守ろうとする日本とそれを阻止する中華民国との衝突が激化し、満州国建国から日中戦争、日米戦争へと発展して行くのである。

さて日露戦争に話を戻そう。

1904年2月4日開戦決定、6日ロシアとの国交断絶を通告、8日に第一軍の先遣隊が仁川に上陸、旅順港外のロシア軍に海軍も夜襲をかけ、ロシアは9日、日本は10日に宣戦を布告した。

＜勝敗を決めた陸軍の戦い＞

日本軍は四軍に編成されて、大山巖元帥が総司令官・児玉源太郎大将が総参謀長に任命され、南満州には32万の兵力が送り込まれた。日本はまず旅順を標的とした。四軍の動きと各司令官は下記の如くである。



大山 巖



児玉 源太郎

第一軍 司令 黒木為楨（くろきためもと） 薩摩藩 60歳

先遣隊が仁川に上陸して朝鮮半島を北上、1904年5月に摩天嶺（まてんれい）でロシア軍を破って遼陽を目指す。日本陸軍の「錐（きり）」の役割を担った最強軍団司、陸軍の最古参の一人で第四軍の野津と共に大山元帥に対し「弥介」と名前と呼べる存在。明治天皇を相撲で遠慮なく投げ飛ばして平然とし周囲をはらはらさせた。戦術眼は名人芸の域にあり、戦の潮時を肌で見抜ける戦争職人。

彼は軍人としてどこの学校にもなんの教育も受けていないことを見ると、優秀な戦術家や司令は知識や教育だけでは育たないことの証明である。彼に陸軍随一の作戦参謀で

ある藤井茂太を配し、神出鬼没の強力な遊撃隊の役目、手駒的存在の役を果たす。以前来日した、敵将クロパトキンが黒木に睨まれて肝を潰し、それが祟って、以後黒木に対し苦手意識を持つようになった。外国での評価は高く、戦後外国で「クロキ」という名前の町が多く生まれた。野津と共に日本陸軍の参謀本部から最も恐れられた猛将であった。



黒木 為楨

第二軍 司令 奥保鞏（おくやすかた） 小倉藩 58歳

藩閥外にありながら絶対外せない戦いのプロフェッショナル。耳が聞こえないが戦いの功さには定評があった。「東洋一の戦術家」と謳われた立見尚文（なおぶみ）に匹敵すると言われた人物だが、己の功績を誇るどころか、徹底して隠すという信念と情熱があり、記録にも残っていないが、どんな戦闘でも戦局でも「奥がいれば安心」と言われた。この奥には小川又次陸軍中將が第二軍の第四師団長として参戦していた。同じ小倉藩であるが「今謙信」と謳われた軍事の鬼才であった。小川は陸軍大学教官時代にメッケルの主張に異論を唱え、一步も引かぬ烈しい気性の持主だった。戦局を多角的に見れる独創性があり、卓越した用兵で貢献した。金州城を抑える命令を受けるが、日本の参謀本部は金州城近くの南山の要塞化工事がなされた事を知らず、一日で落ちると楽観していた。第二軍の見たものは突貫工事で一変した南山であり、到底攻められないと判断した奥は、至急大本營に状況を報告し重砲を要求したが、「その必要なし」の返答だった。出したくとも予備の重砲がなかったのだ。

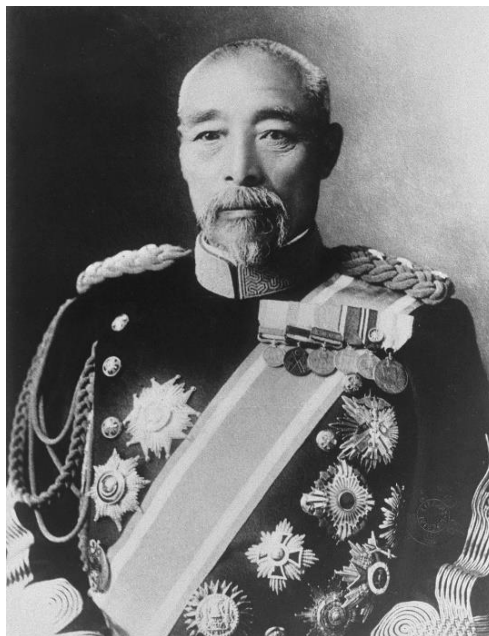
奥は全砲を南山に向け、放ったが5時間たっても敵の反撃は変わらず砲弾が底をついてしまう。無理を承知で歩兵の突入作戦を二度も行うが、敵の砲火と機関銃によって屍の山を築いた。日本陸軍で初めて近代戦争の要塞陣地の洗礼を受けたのである。この凄

惨きあまりない結果に、一旦退却の進言に苦しむ時、耳の聞こえない奥に一枚のメモが第四師団長の小川から届く。メモには「敵の左翼弱点に我が歩兵師団で集中攻撃をして一角を破り、それを前線に広げてはどうか」と記されていた。頼んでいた海軍の砲撃も苛烈となり、二軍は予備弾も打ち尽くし、歩兵の突撃によって南山が占領された。奥は歩兵による突撃作戦は敢行したくなかったが、大本営の強い要望で総攻撃を強いられる。奥は自軍の火力不足を補うため、海軍に支援を要請する。正に苦肉の策だった

。

優れた用兵は、味方の被害を最小限にして、敵への効果を最大限に拡大するものだとされる。太平洋後期に特攻隊という玉砕法が取り上げられた時に、それでは技術も戦法もないではないかと歴戦のパイロット達は強く反発したと聞く。歩兵の突撃は悪天候の夜を徹して行われ、疲労極限の兵はよく戦ったが、思うほどの成果をあげられず一時は撤退も考えたが、小川のあともう一押しで戦端が開ける.... とのメッセージで奮い立ち南山を占領したのである。

この様に現場の状況と大本営との間には距離があり、それが認識の違いとなって将兵の多くが失われた。この問題は、その後の遼陽会戦の首山堡（しゅさんぽ）でも表面化する。大本営の首脳部も当初は信じなかったが、それが事実だと知り、近代戦争の尺度の基準を認識するようになり、その後兎玉は現地に立つようになった。奥はこの様に日露戦において出来る限り無理攻めを避けた名将だったが、大本営の参謀部によって強いられた歩兵の突撃作戦の被害は甚大なものだった。終戦後の華やかなパレードも耳の不自由な奥司令には歓声は聞こえない。静寂の行進の中で日の丸を振る小学生の隊列が目に入った時、奥司令はその列に向かって、瞑目し「すまん」と言って涙したという。多くの部下を死なせた無念の涙だったのであろう。昭和5年85歳で没している。



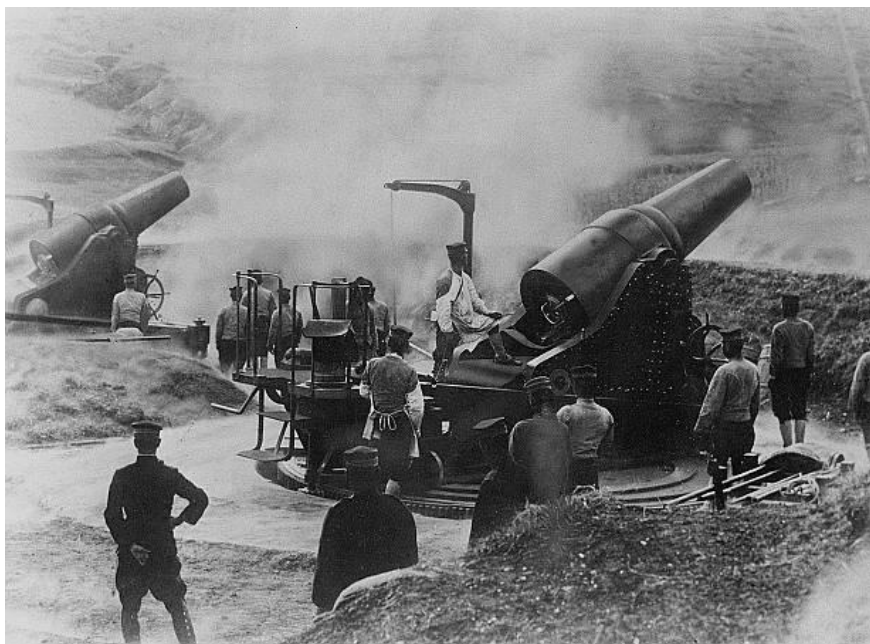
奥 保鞏

第三軍 司令 乃木希典 長州藩 55歳

時代に翻弄され続けた「悲劇の将軍」は常に武人であろうとした。彼の左目は見えず、左足も負傷し足を引きずって歩いていた。第二軍が戦った南山に乃木が第三軍の参謀達と訪れたのは6月6日であった。焼けた山裾がここで起こった激戦を生々しく物語っていた。それでも足元には花が咲いていた。乃木の長男勝典もこの南山戦で戦死している。「野に山に討死なせし益荒男の あとなつかしき撫子（なでしこ）の花」と詠んだ。また硝煙の臭いが漂う南山で詠んだ詩は有名である。（三川草木転荒涼....）

第三軍は海軍の要請によりバルチック艦隊到着前に旅順要塞を攻略し、港内のロシア艦隊壊滅を目指す。8月と10月の攻撃はステッセル司令の守る要塞を崩すことができず、多くの死傷者を出す結果になった。彼は軍人としては戦い下手として定着していたが、叔父の玉本文之進、吉田松陰とも縁続きであり学問で身を立てたいとの思いが強かった人物である。乃木が玉本文之進から叩き込まれたのは質素・儉約・勤勉であった。彼が軍人として目覚める転機は明治19年のドイツ留学である。軍人としての在るべき姿を学び、変身し理想的軍人であろうと努めた。

第三軍は近代要塞との戦い、即ち生身の人間が肉弾として鉄とコンクリートを砕かねばならない体験を味わうのである。11月からは児玉総参謀長の直接指揮によって3回目の総攻撃が行われ、12月5日ついに旅順を見下ろす203高地を占領、そしてこの高地に据えた「28サンチ砲」によって旅順港内の太平洋艦隊を壊滅させた。この戦いで5万9000人が死傷、ロシアは3万人余りといわれ戦史に残る消耗戦となった。



28 サンチ砲

1904年1月1日ステッセル司令官は降伏を申し出、5日には有名な水師營で降伏文書が調印された。乃木は敵将ステッセルの帯剣を許し、名誉を傷つけず武士道の惻隱の情をもって接した。児玉と乃木は親友であり、児玉は常に乃木を庇って来た。

西南戦争での軍旗を奪われる失態で深く傷つき、自殺未遂だが決行した乃木を児玉は心配し、又彼を愛していた。二人の親交は生涯続いて行った。



乃木 希典

第 四 軍 司令官 野津道貫（のづみちつら）大将 薩摩藩 63 歳

日本陸軍の参謀に最も恐れられた薩摩隼人の軍人、強烈な薩摩の猛将軍、その戦術眼と用兵をもって着実に前進して行く、ゆっくりと確実に。「待つ」という行動を戦術にした名将である。常に敵の正面に在り、第一軍・第二軍と共に遼陽・奉天の会戦へと進むのである。

第四軍は7月31日折木（せっき）城を占領、ロシアは2～3日ある程度の抵抗をしては撤退し、日本軍の補給を困難にするために奥へ奥へと誘い込む作戦であったので、約7か所で戦い乍ら遼陽へと進んで行くが、日本は兵站輸送が思うようにはかどらないので苦戦を強いられたのである。野津の戦術は味方の被害を極力避けて、相手の隙に乗じて一気に攻めるという戦い方で一貫している。第四軍の死傷者が最も少なく、最後の決戦の奉天会戦では、満身創痍の日本軍の中核となって奮闘した。参謀本部では黒木以上に怖いのが野津道貫であった。この二人は大山元帥に対し「弥介」と呼び捨てに出来る存在であり、小僧扱いの児玉など、怒鳴ることは屁でもなかった御大であった。満州軍総司令官に野津をとの声があったのは、その様な人間関係からだった。嘗て西郷従道や大山と共に「西瓜売り決死隊」で英艦に切り込む特攻作戦にも加わっていた。渡米の折も公務を途中ですっぽかし、ロビンソン砦に向かった。当時はインディアンとの最終決戦の頃で、ほんの3か月前にカスター將軍の第七騎兵隊の悲劇が起きている中で、全

く英語を解しない野津が乗り込んだ先は、最前線基地であったわけだ。正に剛胆そのものである。

日露戦では参謀長の人選が問題となった。野津の経歴と性格を皆恐れたのだ。結局娘婿の上原勇作少将に落ち着く、野津の存在感が理解できる逸話である。豪胆な性格、（若い時は、処刑者が出ると真っ先に行ってその生肝を食べていた）とは裏腹に、無理な「力攻め」はしない彼に対し、大本営の参謀達は一切干渉することを憚（はばか）った。ただ四軍の参謀達は狩りで捕まえてきた獣の生き血を飲まされるのには困ったようだ



野津 道貫

平成 27 年 9 月 25 日

志雲会塾長 有馬正能